

水神祠から推定する河川の古地形と生活 —庄内川・矢田川合流点付近を中心に—

*福岡麻実・村上哲生（中部大学・応用生物学部）

1. はじめに

洪水が頻発する地域では、堤防鎮護や破堤位置の記憶のために、水神が祀られる例が多い。それらの水神祠に関する研究は、主として民俗学分野で手掛けられてきたが（大森，1985；山田，2000）、かつての河川地形や、人と川との関わりを知る手がかりとして古陸水学にも応用できるものと考えられる。

本研究は、洪水の常襲地帯であった庄内川・矢田川合流点付近（名古屋守山区）を対象として、水神祠の祭神や分布から、この地域の住民生活と川との関わりを復元しようとするものである。

2. 方法

調査場所の庄内川・矢田川の合流点付近は約13 km²の面積で、標高は合流点付近が最も低く約10 mである。そこから北東に位置する、標高約90 mの丘に向かって傾斜している地形である。この範囲で、1/2.5万地形図に記載されている神社を網羅的に調査し、祭神分布を明らかにした。

3. 結果・考察

（水神分布）

確認できた神社は35社であった。内、龍神、宇賀神（稲荷社）、須佐之男命（津島社、天王社）を祭神とするものは、それぞれ5社、2社、6社であった。龍神、宇賀神、須佐之男は水を司る水神とされている。全体の4割弱が水神を祀る神社である。

水神信仰は様々な神に仮託され祭祀が行われ、また、時代と共に祭神が変更されている可能性が指摘されている。龍神は、縄文時代に遡る蛇信仰に由来し（佐藤，2001）、また、稲荷信仰の根源にあるのは水と関係する蛇信仰であり、後代になって狐が重ね合わされるとされている（吉野，1980）。また、木曾川でもかつての洪水常襲地帯に稲荷社が置かれ、堤防の稲荷社には罔象女神などの記紀に現れる水神が合祀されている例がある。現在の木曾川中下流域の水神祭が、須佐之男を祭神とする天王祭に関連した行事として扱われているように、水神としての須佐之男の祭祀も比較的新しい時代の水神変更をしめすものであろう。多様な水神の共存は、この地域では、長期にわたり水神信仰が継続されていたこと

を示すものと考えている。

（救命壇としての神社の役割）

調査地域では、水防のための水屋建築が残っている。木曾川沿いの輪中地域などでは、水屋と共に神社が救命壇として利用されている例が多いが、この地域の神社の石垣は、いずれも2 m未満であり、水屋の石垣高の2.8 mよりも低いものであった。この地域の神社が、救命壇の機能を持ったものであったかについては疑わしいと考える。

（水路沿いの小祠）

鳥居や拜殿を備える神社の他に、朱色に塗られた小祠が11社あり、旧御用水や古川沿いに分布が集中していた。これらの祠は、地図的な目印となる規模ではなく、地形図には描かれていない。御用水とは、庄内川で取水された水を名古屋城へと送っていた水路で、現在は暗渠となっている。古川は、かつては五ヶ村悪水や八ヶ村悪水と呼ばれ、排水路として使われていた人工河川であるが、現在は準用河川として雨水の排水路として利用されている。

都市内の水路に沿った稲荷の小祠は、江戸にもあったことが知られており、「河岸稲荷」と呼ばれていた（中村，2003）。関東の河岸稲荷は、治水目的で信仰されていた例があるものの、この地域の用水路、悪水路の何れも、大規模な洪水を起こす可能性は小さく、前述の治水のための水神とは異なる機能を期待して祀られていたものと考えられる。

4. 引用文献

- 中村禎里（2003）：江戸の稲荷。中村禎里（著）狐の日本史 近世・近代（編），129-248。日本エディターズスクール出版部，東京。
- 大森恵子（1985）：稲荷と水神信仰。日本民俗学，（157・158）：117-132。
- 佐藤ひろみ（2001）：水神のルーツ；貴船と阿蘇の水神探訪。23，91-104
- 山田邦和（2000）：鴨川の治水神。花園大学文学部研究紀要，（32）：53-86。
- 吉野裕子（1980）：狐 陰陽五行と稲荷信仰。もの与人間の文化史 39：153-171